

初任の小学校では、放課後にサッカーの指導も行ってた。石川地区では、小体連の大会があった。男子はサッカー、女子はバスケットボールだった。その大会に向けて各小学校が練習を積み、練習試合等を行い、試合に臨むわけである。

あの頃は、土曜日午前中は授業だった。そして、午後からは大会が近づくと、毎週のように練習試合が行われた。サッカー素人の私は、1年目は主担当の先生につき、一から勉強した。審判講習会にも参加して、審判の資格も取得した。指導者は、練習試合や本番の大会でも審判をしなくてはならなかったのである。

私が勤務した玉川第一小学校のサッカーチームは、弱くはなかった。3年目は主担当となった。自分の担当学年の子どもたちも5年生となっていた。練習試合をやってみると、他の小学校よりも強いことがわかった。「これはいけそうだな」という感触があった。

しかし、これがよくなかった。本番の大会では、石川地区で一番児童数の多い学校と当たった。児童数が多いということは、人が多いわけであるからそれ相応に強いわけである。だが、この年はさほどではなかったのである。

練習試合の様子から、玉川第一小学校が強いということがわかり、向こうは思い切った作戦に出てきた。サッカーでは、よく見られる、サッカーだからこそできるのだが、徹底的に「引いた」のである。守りを固めて、攻めてこないのである。すぐに、向こうの作戦はわかった。最初から0-0のPK戦ねらいだったのである。後で聞いたことだが、向こうはPKの練習をずいぶんしてきたとのことだった。

さすがに、一方的に引くチームと試合をしたことはなかった。それでも、子どもたちは攻めに攻めた。こうなると、一瞬のすきをつくカウンターがこわい。ハーフタイムに、そのことは指示した。だが、後は効果的な策はなかった。

後半も時間が進んでいくと、一方的に攻めているにもかかわらず、得点ができないことからの焦りも出てくる。応援の保護者からは、「先生、何とかならないの」という声も聞こえてきた。子どもたちは、何とか相手の守備を崩して得点しようと波状攻撃をかけるが、今一步のところゴールを割ることができない。

そして、試合終了のホイッスル。向こうは、もう勝ったような騒ぎである。一方、こちらはというと、PK戦への気持ちの切り替えが難しい状況にあった。PK戦が始まった。結局、負けてしまった。私は内心、相手の作戦に対して、相手の指導者に対して、「小学生の試合で、ここまでやるのか」と思った。同時に、これがサッカーか、これもサッカーかと思った。

我がチームは期待していただけに、子どもたちも保護者も落胆していた。私は、その責任を一身に感じていた。相手チームは、その後勢いに乗った。なおかつ、次の試合からは、引くこともなく試合をしているではないか。ということは、対玉川第一小学校のときだけの作戦だったわけである。改めて「ここまでやるのか」と思い知らされた。

今でも、試合中の保護者からの悲痛な叫びにも似た声は忘れられない。緊張しながらの審判も忘れられない。その試合で、最初の危険なプレーがあったときに、勇気をもって笛を吹かないと、試合が荒れると教わった。サッカーの指導に携わったのは、この3年間だけとなった。指導者としての力不足を味わった3年間だった。